

木村 純子

地域への誇りと愛着が創る
持続可能な地域社会

2025/08/26

No. **274**

Junko Kimura

Sustainable local society created
by pride and attachment to Territorio

August 26, 2025

No. **274**

地域への誇りと愛着が創る持続可能な地域社会

木村純子

1. はじめに

日本の農村の衰退が止まらない。中山間農業地域は 2045 年までに人口が半減し、過半が 65 歳以上の高齢者になると見込まれている(農林水産省, 2019)。人口減によって農業インフラは老朽化し、地域農業を支えるあぜ草刈り、溝さらい、水路補修といった共同活動が立ちゆかなくなっている(日本農業新聞, 2024)。

イタリアは、将来の見通しが不透明な地域、後れを取っている地域、深刻で永続的な自然的・人口的制約に直面する地域を、共通農業政策(CAP)が支援しているものの(European Union, 2020)、都市との格差を感じている農村住民は多い。

農村を存続させようとする住民らの主体的な活動は、レジスタンスの形である。これまで筆者は、ステークホルダーのボトムアップ型活動に注目し、農村の内発的発展の論理を説明してきた(木村, 2022; 2024; 2025)。本稿は、住民の積極的参加と協力、および活動プロセスが生む地域への愛着が、持続可能な地域社会を形成するプロセスを考察する。

地域への愛着は、地域の土地、文化、歴史、自然環境に対する深い感情的な結びつき、およびそれを守り、次世代に継承しようとする意識や行動である。具体的には、住民が土地を単なる経済的資源としてではなく、生活の基盤やアイデンティティの象徴として捉え、地域の価値を維持・発展させるために積極的に関与する姿勢である(Ferreri, 2023)。自然環境、歴史的背景、伝統的産業、地域資源の活用、持続可能性への取り組み、地域のオリジナリティの強調によって生まれる(Sarno, 2017)。

地域愛着の測定尺度は 6 つある。1) 住民が土地を所有し続ける意欲や行動、小規模な土地でも維持しようとする姿勢といった土地の所有意識、2) 旧市街の保存への関与、地域の伝統的な農法や文化を復活させる活動への参加といった地域の歴史や文化への関心、3) 有機農業や PDO/PGI 認証の推進、地域の自然環境や景観の維持といった地域資源の保護と活用、4) 地域ネットワークへの参加、地域の観光や教育活動への貢献といった地域活動への参加、5) 若い世代が地域の価値を再認識し、伝統を継承する意欲、地域のアイデンティティを守るための教育活動といった次世代への継承意識、6) 地元製品の生産と販売を通じた地域経済の活性化、地域内での農産物の加工・販売といった地域経済への貢献である(Ferreri, 2023)。

テリトリーと地域愛着は相互に作用する。テリトリーの文化的・自然的価値は、住民の地域愛着を育む基盤となる。同時に、地域愛着によるテリトリーを守り発展させようとする行動が、テリトリーの文化的・自然的価値を強化する。この相互作用は、地域の持続可能な発展とアイデンティティの維持を促進する(Sarno, 2017; Ferreri, 2023)。

地域への愛着は、持続可能な地域社会を形成できることから非常に重要である。地域には、固有の生態環境や伝統文化がある。これらの資源を活かせるかどうかは、地域に居住あるいは関係する全ての人々が、その地域に豊かさや愛着と誇りを実感することにかかっている。

具体的な実践として、たとえば、アルベルゴ・ディフーズ(分散型ホテル)は、単に観光客に地域の文化や生活に触れる機会を提供するだけでなく、住民と地域社会とのつながりを強化し、住民の地域への愛着を育み、持続可能な観光の発展に寄与する(Sarno, 2017)。

本稿は、これまでの議論から(木村, 2024; 2025)、持続可能な地域社会の形成プロセスの論理を、次の通り提示する。テリトリーは、住民が豊かさや愛着や誇りを実感できる機能が埋め込まれた社会システムの形成プロセスであり、その地理的領域である。

ステップ 1

地域固有の生態環境や伝統文化の要素を抽出する。要素とは、地形、自然の共有財、共有財を活かした産業、歴史景観や伝統的産業による産業観と遺構、これらと結び付いて形成された伝統文化である。抽出した価値をベースに、「△△がある暮らし」の価値を開発し、地域の人々に伝える。

ステップ 2

「△△がある暮らし」とは、農業を起点としたモノと人との循環があり、その経済波及効果によって形成される生業の社会風景である。地域の人々は、その価値に合意し、自分ごと化し、協力する。

ステップ 3

「△△がある暮らし」という価値をテコにした共創型産業システムを内発的に構築する。共創型産業システムとは、農業と他産業との統合的新事業である。1 次産業、2 次産業、3 次産業間に相互依存関係があり、農山漁村の資源を統合的に活かした新事業の複合的な仕組みを作る。

ステップ 4 [手段]

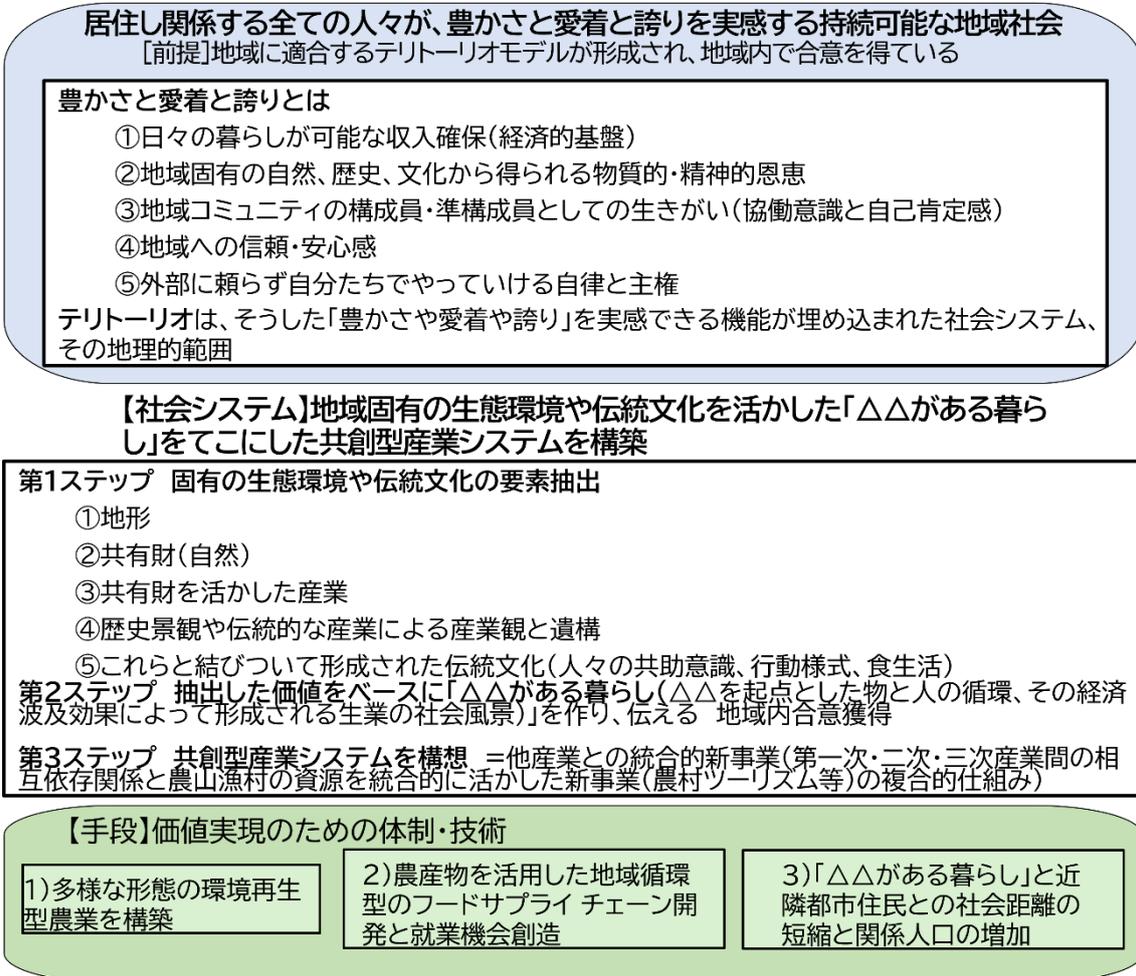
価値実現のために具体的な手段を実践する。手段とは、1)多様な形態の環境再生型農業の構築、2)農産物・食品を活用した地域循環型のフードサプライチェーンの開発と就業機会創造、および 3)農業がある暮らしと近隣都市住民との社会距離の短縮と、関係人口の増加である。

ステップ 5 [到達点]

居住し関係するすべての人々が、豊かさと愛着と誇りを実感する持続可能な地域社会が形成される。豊かさと愛着と誇りとは、1)日々の暮らしに必要な収入確保(経済的基盤)、2)地域固有の自然や文化から得られる精神的・物質的恩恵、3)地域コミュニティの構成員・準構成員としての生きがい(協働意識と自己肯定感)、および 4)地域への信頼・誇りである。テリトリーは、そうした豊かさと愛着や誇りを実感できる機能が埋め込まれた社会システ

ムであり、その地理的範域である。このモデルは図1の通り示される。

図1 人々が豊かさと愛着と誇りを実感する持続可能な地域社会の形成論理



出所：前田浩史(n.a.¹)

2.方法論

2025年5月1日から5月4日に、イタリアで調査を実施した。訪問先は、トスカーナ州フィレンツェ県ムジェッロ(Mugello)のVicchio(人口8,100人)、トスカーナ州アレッツォ県カセンティーノの12のコムーネのうちの6つである。カセンティーノの面積は800平方キロメートル、人口は48,800人である。訪問先の6つのコムーネは、1)ビッビエーナ(Bibbiena 人口12,000人)、2)ポッピ(Poppi 人口5,800人)、3)プラトヴェッキオ(Pratovecchio 人口3,092人)、4)カステル・サン・ニコロ(Castel San Niccolò 人口2,485人)、5)ラッジオーロ(Raggiolo 人口60人)、および6)モッジョーナ(Moggiona 人口60人)である。

¹ 2025年3月岩手県北上山系で実施した畜産に関わる合同調査を元に前田氏が導き出した仮説モデル。

現地の調査協力者に調査デザインを依頼した。トスカーナ州庁の農業、植物、畜産物の生産・促進・農業および食品関連企業の投資支援課(Produzioni Agricole, Vegetali e Zootecniche, Promozione, Sostegno agli Investimenti delle Imprese Agricole e Agroalimentari, Regione Toscana)の農業食品製品の品質と典型性(Qualita' e Tipicita dei Prodotti Agroalimentari)担当の行政官アンジェラ・クレシェンツィ氏(Angela Crescenzi)、およびフィレンツェ大学・農業経済学部准教授アンドレア・マレスコッティ氏(Andrea Marescotti)と研究員マテオ・メンゴニー氏(Matteo Mengoni)である。

インタビューの対象者は、表1のとおりである。

表1 インフォーマント・データ

氏名	肩書	所属	調査日
スヴェン・ロー (Sven Rho)	栗農家(Castagne producer)	アルベロ・ブオーノ (L'Arbero Buono) Via Villore 205, Vicchio, Firenze	2025年5月1日
ファビオ・フェッリ (Fabio Ferri)	キアニーナ牛農家 (Chianina breeder)	マレーナ農場(Fattoria di Marena, Bibbiena)	2025年5月2日
ダニエレ・ブロンキ (Daniele Bronchi)	評議員(Assessore)	ビッビエーナ市 Comune di Bibbiena	2025年5月2日
ウォルター・ジョルジ (Walter Giorgi)	広報 (Communication)	モンテ・サン・サヴィーノサラミ社 Salumeria di Monte San Savino	2025年5月2日
トマーズ・カンペデッリ (Tommaso Campedelli)	ディレクター (Director)	羊飼いの学校(Scuola della Pastorizia)	2025年5月2日
マウラ・ルカテッロ (Maura Lucatello)	有機農家&アグリトゥ リズモオーナー	アグリトゥリズモ・ルカテッロ Agriturismo Lucatello Localita San Donato Pratovecchio, Arezzo	2025年5月2日 ~5月4日
フランコ・フランチェ スキーニ (Franco Franceschini)	地域奉仕活動ラッジ ョーロ旅団(Brigata di Raggiolo)	地域奉仕活動ラッジョーロ旅団(Brigata di Raggiolo) Ecomuseo della Castagna e della Transumanza, Raggiolo	2025年5月3日
マリーナ・カステッリ (Marina Castelli)	キロメトロゼロ生産 者	ヴァルテッジーナ・キロメトロゼロ生産者組合 (Associazione Valteggina KM0) San Piero in Frassinio, Ortignano Raggiolo Podere Pallereto di Sopra(農場) Località Pallereto di Sopra, Ortignano	2025年5月3日
シモーネ・ペコリーニ (Simone Pecorini)	酪農家&チーズ職人	ラ・カーザ農場 (Azienda Agricola Fattoria La Casa) Località La Casa 64, Castel San Niccolò	2025年5月3日
フランチェスカ・トー ジ (Francesca Tosi)	有機農家&教育ファーム	フィアンマソレ農場(Fattoria FiammaSole) Località Paglkiericcio, Scasso, Castel San Niccolò	2025年5月3日
イラリア・カンプリン コリ (Iaria Camprincoli)	会長	カセンティーノ有機ディストリクト協会 Associazione Biodistretto Casentino	2025年5月3日
パトリツィオ・アルベ ルティ (Patrizio Alberti)	モッジョーナ村プロ ローコ (Proloco Moggiona)	モッジョーナ地域協同組合 (Cooperativa di Comunita di Moggiona) Bottega del Bigonaio Via di Camaldoli 25, Poppi, Arezzo	2025年5月4日
ダニーロ・タッシーニ (Danilo Tassini)	モッジョーナ村ボラ ンティア	モッジョーナ地域協同組合 (Cooperativa di Comunita di Moggiona) Via di Camaldoli 25, Poppi, Arezzo	2025年5月4日

5月2日～4日は、アグリトゥリズモのルカテッロ(Agriturismo Lucatello)に滞在した。5月2日、ポッピにあるエコミュージアムのグイディ伯爵の城(Castello dei Conti Guidi di Poppi)でカセンティーノの歴史の情報を収集した。5月4日、1012年に建てられたアレツォ県のカマルドリ聖なる庵(Sacro Eremo di Camaldoli)とカマルドリ修道院(Monastero di Camaldoli)を訪ねた。

3.記述

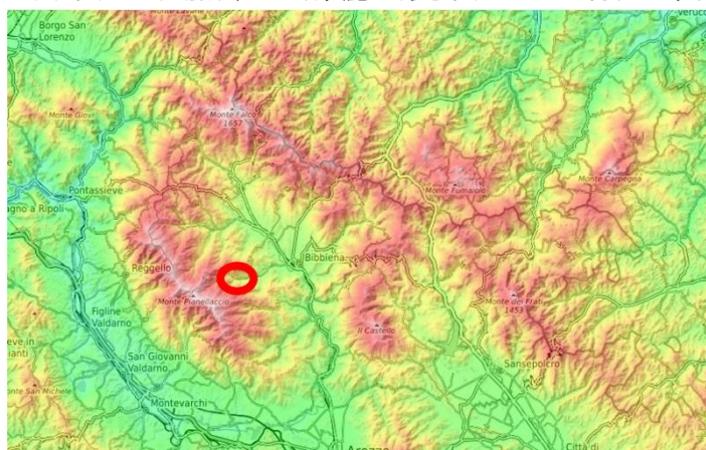
トスカーナ州アレツォ県のカセンティーノの小さな集落を事例に取り上げ、現地調査で収集したデータをもとに、文献とオンラインの情報を補完的に用いて、持続可能な地域社会の形成プロセスを確認する。

3.1. 固有の生態環境や伝統文化(共有財)の要素抽出、結合、表象化を通じた価値開発

トスカーナ州アレツォ県には、ヴァルダルノ(Valdarno)、ヴァルディキアーナ(Valdichiana)、ヴァルティベリーナ(Valtiberina)、およびカセンティーノの4つの谷がある。アルノ川の源流(Capo d'Arno)がファルテローナ山(Monte Falterona)から12のムーネの1つスツビアーノ(Subbiano)に流れこむ。カセンティーノは、イタリアのトスカーナ州アレツォ県に位置する中山間地域で、第二次世界大戦後に人口減少や機能低下に直面した。

12あるムーネの1つ、ラッジオーロ(Raggiolo)は、1,592mのピアネッラッチョ山脈(Pianellaccio)東麓にある標高483mの村である。カセンティーノで一番大きいムーネのビッビエーナ(Bibbiena、人口12,000人)から西10キロに位置する。イタリアの最も美しい村(Borghi più Belli d'Italia)に登録されている。7世紀頃にロンゴバルド人が築いた。15世紀、コルシカ人がやってきて、破壊された城に居住した。19世紀から第2次世界大戦までの人口は、1,000人であったが、現在はわずか60人である。

図2 ピアネッラッチョ山脈(1,592m)東麓にあるラッジオーロ村(○で囲った部分)



出所：Mappa Topografica Unione dei Comuni Montani del Casentino²

² topographic-map.com. (n.a.) “Mappa topografica Unione dei Comuni Montani del Casentino”. (2025

古くから、周囲を囲む豊かな自然環境が、多様な産業を生んだ。山岳から栗、森から木炭、川から水車、水車を利用して挽く栗粉、グロッセート県マレンマへの水平移牧による畜産と羊毛製品である。これらが、地域の経済を支えてきた(II Bel Casentino³; Eco Museo del Casentino⁴)。たとえば、ラッジオーロ村は2つの川に挟まれている。1つはテッジーナ川で、溪谷ヴァルテッジーナ(Valteggina)の名称の由来になっている。もう1つはバルボツァイアの源流(Barbozzaia)である⁵。この川が栗の産業を発展させた。

カセンティーノは、山岳地帯に位置し、豊かな自然環境、歴史的遺産、伝統的な文化を有する。これらは、都市化や人口減少で失われる危機に直面した

(Rossi, 2011)。1990年代、カセンティーノで地域資源の活用を通じた再生を目指すボトムアップ型の取り組みが始まった。カセンティーノ市町村連合(Unione dei Comuni del Casentino)が推進し、調整するプロジェクトである。EUの補助金を受け、1998年、エコミュージアム・プロジェクトがスタートし、地域全体を対象としたネットワーク型エコミュージアムを構築し、16の拠点(アンテナ)が設立された(Rossi, 2011)。

地域の文化遺産を保護し、地域住民と訪問者の双方に価値を伝えることで、農村振興に貢献できる。エコミュージアムは、単に観光やイベントの開催を活動の中心にするのではなく、地域の文化的価値を再発見・再形成する。16のエコミュージアムをネットワークで結び付けることで、プロジェクトの質を向上させられる(Rossi, 2016)。

年5月20日閲覧)

<https://it-ch.topographic-map.com/map-p3w2dn/Unione-dei-Comuni-Montani-del-Casentino/?center=43.69121%2C11.81442&base=2&zoom=11&overlay=0>

topographic-map.com HP. (n.a.) “Raggiolo”. (2025年5月20日閲覧)

<https://ja-ip.topographic-map.com/map-x4s55k/Raggiolo/?center=43.67582%2C11.66199&zoom=9&popup=43.68684%2C11.80412&base=2>

Carta tecnica Regionale. (n.a.) “sit comune di Ortignano Raggiolo”. (2025年5月20日閲覧)

<https://ortignanoraggiolo.ldpgis.it/ctr/pub/index.php?viewer=ldp>

³ Il Bel Casentino HP (n.a.) “Sul Pratomagno uno dei Borghi più Belli d'Italia: Raggiolo,” (2025年5月20日閲覧)

<https://www.ilbelcasentino.it/raggiolo.php>

⁴ Eco Museo del Casentino (n.a.) “Ecomuseo della Castagna e della Transumanza di Raggiolo”. (2025年5月20日閲覧)

<https://ecomuseodelcasentino.it/it/ecomuseo-della-castagna-e-della-transumanza>

⁵ Il Bel Casentino. (n.a.) “Raggiolo in Casentino, una bella valle Toscana che puoi conoscere in ogni suo dettaglio con questo sito”. (2025年5月20日閲覧)

<https://www.ilbelcasentino.it/raggiolo-seq.php?idimg=6058>

図 3 カセンティーノの 16 のエコミュージアム・ネットワーク
(11 番がラッジョーロ村、7 番がモッジョーナ村)



出所: Eco Museo del Casentino

カセンティーノのエコミュージアムが成功した理由は 6 つある。第 1 に、物質的・非物質的な文化遺産を保存し、観光資源として活用することで、地域のアイデンティティを強化できた。第 2 に、地域住民の参加を促し、彼らが自分たちの文化遺産を守る主体になるよう働きかける。たとえば、コミュニティマップの作成を通じて、住民が自分たちの地域の価値を再認識し共有するようになる。この活動は、地域住民の誇りを高め、コミュニティの結束を強化する。第 3 に、学校や子供向けの教育プログラムを提供し、次世代に地域の文化遺産の重要性を伝えた。訪問者向けに展示やガイドツアーを通じて、地域の歴史や自然環境についての知識を広める。これらによって、地域の価値を広く認識させ、持続可能な観光の基盤を築く。第 4 に、地元の特産品や伝統的な技術を活用したイベントやマーケットを開催し、地域経済を活性化した。地元の食材や製品を使用した祭りを開催し、地域の農業や手工業を支援し、観光客を引き寄せて地元の商業活動を促進する。第 5 に、地域の自然環境を保護しながら観光を促進する持続可能なアプローチを採用した。森林や川沿いの散策路を整備して、訪問者が自然と触れ合いながら地域の文化を学べる。地域の環境保護と観光を両立させる。第 6 に、カセンティーノ内の各地域を結び付けるネットワークを構築し、地域間の連携を強化した。各地域独自の資源を共有し、相互補完することで、地域全体の発展を促進する

(Eco Museo del Casentino⁶)。

3.2. 地域内の合意・自分ごと化・協力

エコミュージアムは、地域住民の参加を必要とする文化的・社会的プロジェクトである。参加プロセスは、情報の提供やニーズの収集のみならず、積極的な関与が必要である(Rossi, 2011)。

カセンティーノのエコミュージアムも、地域住民の熱心な関与が重要であった。第1に、地域住民がコミュニティマップの作成に参加することで、自分たちの地域の価値や特性を再認識し、それを共有した。住民は、自分たちの文化遺産を守る主体となり、地域のアイデンティティを強化した。

第2に、住民が、エコミュージアムのアンテナと呼ばれる拠点を運営する。エコミュージアムの運営には、住民のボランティア活動が不可欠である。ボランティアは、施設の管理や運営のみならず、地域の文化遺産の伝承も行う。

第3に、住民は、エコミュージアムが主催する地域イベントや祭りに積極的に参加する。イベントでは、地元の特産品や伝統的な技術を紹介し、地域の文化を広める活動を行う。

第4に、住民は、自分たちの知識や技術をエコミュージアムの活動に提供する。たとえば、伝統的な手工芸や農業技術の実演、地域の歴史や物語の共有などを通じて、訪問者に地域の文化を伝える。

第5に、住民は、地域の学校や教育機関と連携し、学校や子供向けの教育プログラムに協力し、次世代に地域の文化遺産の重要性を伝える役割を担う。訪問者向けにも、ガイドやワークショップを通じて、地域の知識を広める。

第6に、住民はエコミュージアムが実施する地域プロジェクトに参加し、文化遺産の保護や観光資源の開発に貢献する。プロジェクトはたとえば、森林や川沿いの散策路の整備、伝統的な建築物の修復である(Eco Museo del Casentino⁷)。

カセンティーノのエコミュージアムのボランティアは、施設の管理、訪問者の案内といったアンテナの運営、伝統技術の実演、資料の収集といった地域の文化的遺産の保存、およびイベントやワークショップの企画・運営を主体的に行う(Rossi, 2011)。ラッジオーロ村のボランティアに地域奉仕活動ラッジオーロ旅団(Brigata di Raggiolo)がいる。ラッジオーロ旅団は、村の活動家を意味するプロローコ(Proloco)の愛称である(Il Bel Casentino⁸)。1994年、長老たちの記憶が徐々に失われていくことで、必然的に忘れ去られてしまう村の歴史、文化、

⁶ Eco Museo del Casentino. (n.a.) “Ecomuseo della Castagna e della Transumanza di Raggiolo”. (2025年5月20日閲覧)

<https://ecomuseodelcasentino.it/it/ecomuseo-della-castagna-e-della-transumanza>

⁷ Eco Museo del Casentino. (n.a.)

<https://ecomuseodelcasentino.it/it/i-musei>

⁸ Il Bel Casentino HP. “Sul Pratomagno uno dei Borghi più Belli d'Italia: Raggiolo”. (2025年5月20日閲覧)

<https://www.ilbelcasentino.it/raggiolo.php>

伝統を保存するという共通の目的で団結した人々がラッジオーロ旅団協会を設立した。

ラッジオーロのエコミュージアムは、栗博物館と羊の移牧(トランスマンツァ)博物館がある。栗博物館は、ラッジオーロ村の旧市街内の解釈センターを含む複数の場所に分散して構成されている。古くから地域に根ざした栗の文化を再発見し保存する。博物館は、栗の栽培や加工、地域の歴史的背景に関連するさまざまな側面を紹介する(Eco Museo del Casentino; Rossi, 2011)。第1に、解釈センターは栗の文化の資料とともに、ラッジオーロ村の歴史や文化、特に16世紀にこの地域を再び居住地としたコルシカ人の物語が紹介される。第2に、栗の乾燥施設(セッカトイオ)がある。秋には、セッカトイオの夜話というイベントを開催し、栗にまつわる物語や伝説が語られる。第3に、旧市街そばの水車小屋にモリーノの製粉所(Molino di Morino)がある。ラッジオーロ村の栗文化を象徴する重要な施設である。栗の加工に関連する伝統的技術が紹介される。第4に、解釈センターから栗街道と呼ばれる散策路が続き、訪問者は栗の栽培や加工に関連する地域の重要な場所を巡ることができる(Eco Museo del Casentino; Rossi, 2011)。

以上のように、訪問者は、栗の栽培や加工に関連する技術や知識のみならず、栗の乾燥施設や水車小屋を見学しながら、地域の自然、歴史的雰囲気、伝統的生活様式、および栗の重要性を体感する(Eco Museo del Casentino⁹)。

写真1 エコミュージアムにボランティアの存在は欠かせない
(移牧文化を説明するラッジオーロ旅団のフランチェスキーニ氏)



出所: 2025年5月2日筆者撮影

⁹ Eco Museo del Casentino. (n.a.) "Ecomuseo della Castagna e della Transumanza di Raggiolo". (2025年5月20日閲覧)

<https://ecomuseodelcasentino.it/it/i-musei>

写真 2 今も稼働する水車小屋を取り巻く景観



出所: 2025 年 5 月 2 日筆者撮影

写真 3 川の動力で稼働させ栗粉を挽く臼(人物はラッジオーロ旅団のフランチェスキーニ氏)



出所: 2025 年 5 月 2 日筆者撮影

もう 1 つの事例として、モッジオーナ村(Moggiona)を取り上げる。モッジオーナは、ピッビエーナから北 16 キロに位置し、海拔 700 メートルの閉鎖された谷の中央の岩山の上にある。上述のラッジオーロ村から 23 キロ離れている。1012 年、修道士がモッジオーナ村から数キロ離れた場所にカマルドリ庵を創設した。

この集落は、カセンティーノ森林国立公園の内に入るか外に出るかの選択を迫られた時、住民たちは公園の内側に留まることを決めた。村には狩猟者がいないため、公園が課す厳しい規則に抵抗する住民はいなかったからである。むしろ、公園に属することで得られる利益に期待した。実際、筆者らがプロローコにインタビューしたバールの改装資金を獲得し、後述のオオカミの帰還展をスタートさせ、観光客の増加による恩恵を受けることができた。

人口わずか 60 人の集落であるが、集落内にエコミュージアムが 2 つと、森林国立公園の支援による展示場が 1 つある。木製品工房博物館(Bottega del Bigonaio)、カセンティーノにおける戦争と抵抗のムゼオ(Mostra sulla Guerra e la Resistenza in Casentino)、およびオオカミの帰還展である(Rossi, 2022)。

モッジョーナ村は木工技術が盛んな地域で、ブドウの収穫時に背負うビゴニーと呼ばれる木製の樽が有名である。1950 年代、村には 25 の木工工房があり、木製品の製造が地域の主要産業であったことから、古くから木材加工は地域のアイデンティティの一部であり、文化的遺産であった。ところが、プラスチック製品の普及で、伝統的技術は衰退した。さらに、近代化と若者の都市への移住で、伝統技術が失われる危機に直面した。そこで、集落の人びとは、伝統的な木材加工技術を守り、地域文化を継承する活動を行うことにした。博物館では、木工技術を復活させる取り組みを行い、訪問者は木製品の製造過程や使用される道具を学ぶことができる。ここでは、住民、特にビゴナイ(bigonai)と呼ばれる職人とプロローコが中心となり、伝統技術を用いた木材加工を実演し、訪問者に自身や家族の経験や技術の背景を語り、交流する(Rossi, 2022)。

活動は、地域住民が自身の文化的アイデンティティを再認識する機会となった。木材加工の実演は観光資源であり、訪問者が増加した。また、若い世代と高齢の職人が交流することで、技術の継承が促進された(Rossi, 2022¹⁰)。

写真 4 モッジョーナ村のかつての 25 のビゴナイ工房(左下に並ぶのは先代のビゴナイオたち)



出所: Parchi Letterari HP¹¹

¹⁰ 世代交代や資金不足といった課題もある(Rossi, 2022)。

¹¹ Parchi Letterari HP. (2021 年 9 月 13 日付) (2025 年 5 月 20 日閲覧)

<https://www.parchiletterari.com/contributi-scheda.php?ID=05153>

写真 5 父が木製品職人だったダニーロ氏による実演



出所:2025年5月3日筆者撮影

モッジョーナ村の2つ目のエコミュージアムは、戦争と抵抗展である。1944年9月、ナチス・ファシストの虐殺で18人の住民が命を落とした。博物館は、この出来事を記録し、訪問者に自由と正義の重要性を伝える(Rossi, 2022)。

3つ目は、オオカミの帰還展である。モッジョーナ村は、カセンティーノ森林国立公園内に留まることを決めたことから、自然との関わりが深い。森林国立公園の補助金で、展示場が作られた。訪問者は狼の生態や地域の自然環境、および自然保護の重要性を学ぶ(Rossi, 2022; Eco Museo del Casentino, n.a.)。

3.3. 自分ごと化した住民によるコミュニティマップ作成プロセスが地域への愛着と誇りを生む

コミュニティマップは、住民が自分たちの地域をどのように認識し、価値を見出しているかを視覚的に表現するツールである。マップは、地域の文化遺産、風景、過去の知識を次世代に伝えるのみならず、住民の視点を反映した地域の未来像を描くことができる(Rossi, 2016)。

イタリアのコミュニティマップは、1980年代にイギリスで導入された教区地図(Parish Map)と呼ばれる文化地図を参考にしたものである(Perkins, 2007; Rossi, 2023)。日本でコミュニティマップといえば、まちの地図は作るが、農村を入れないのとは対照的である。

コミュニティマップは、地理的な地図とは異なり、地域住民が自分たちの生活環境をどのように認識し、価値を見出しているかを示す文化的プロセスである。このツールは、地域の歴史、言語、自然、建築、民俗、景観など、住民が大切にしている要素を記録し、共有することを目的とする。地域のアイデンティティを描く手段であり、単なる地図以上の役割を果たす(Marengo, et als., 2024)。

コミュニティマップのプロジェクトは、地域計画や保護活動の基盤となり、住民参加を促し、地域の価値を再発見する機会となることから、エコミュージアムの活動の一環として広く採用されている(Rossi, 2016)。

ラッジオーロ村のコミュニティマップは、カセンティーノ・エコミュージアムのディレクターのアンドレア・ロッシ氏(Andrea Rossi)のアイデアが発端だった。地域住民に地図を作ることを促し、3つのマップが作成された。その1つがラッジオーロ村のものである(Marengo, et als., 2024)。

2004年、アレツォ県の補助金制度スタディサークル(Circoli di Studio)を活用し、コミュニティマップの作成が始まった。進め方として、第1段階は、背景の整理と準備である。地域のボランティアグループによる研究活動を支援する制度で、ラッジオーロ村は地元の地名学(トポニミー)に焦点を当てた小規模な研究プロジェクトを立ち上げた。第2段階は、地域住民が自分たちの生活環境に対する理解を深めること、およびコミュニティマップ作成の基盤の整理である。プロジェクトを主導したのは、地域の文化保存活動を行っていたフランコ・フランチェスキーニ氏(Franco Franceschini)を中心とするラッジオーロ旅団で、彼らはエコミュージアムの運営にも関与している。地域住民、特に高齢者が作業グループに参加し、彼らの記憶や経験が地図作成の重要な情報源となった。地域のアイデンティティを保存し、文化的・社会経済的な向上を目指す活動が展開された(Marengo, et als., 2024)。

具体的な活動は、以下の通りである。第1は、地域の歴史、生活様式、過去の活動に関する情報の収集である。情報は、住民の記憶や口述、古文書、写真などを通じて得られた。特に高齢者の参加が重要であり、彼らの記憶が地域の文化的遺産を記録する上で貴重な役割を果たした¹²。第2に、収集した情報を慎重に検証し、異なる情報源との比較を通じて正確性を確保した。誤りや不正確な情報を避けるため、信頼性を高める重要な手続きである。第3に、地域住民が集まり、情報を共有し、地図の内容を議論するワークショップを開催した。これによって、住民間の協力が促進され、地図作成プロセスへの参加意識が高まった(Marengo, et als., 2024)。

¹² 古老の言説をビデオアーカイブでも残すようにした。YoutubeのBanca della Memoria del Casentinoで見ることができる(Rossi, 2023)。

<https://www.youtube.com/@BancadellaMemoriadelCasentino/featured>

図 4 住民が作り上げたラッジオーロ村のコミュニティマップ



出所: Ecomuseo della Castagna in Raggiolo

2005 年夏、コミュニティマップが完成し、地域住民にお披露目された。地図は、地域の物質的・非物質的な特徴を記録しただけでなく、住民の生活環境に対する価値観や記憶を反映したものであった(Marengo, et als., 2024)。イタリアで最初に出版されたコミュニティマップの 1 つで、行政の境界や官僚主義の論理を超えた、住民の視点からテリトリーを視覚的にまとめたものである。物語、伝統、伝説、文化的、芸術的な出来事が記されている。地図はラッジオーロのアイデンティティを表わしている。歴史は、ラッジオーロに典型性と特異性を与えるが、ラッジオーロ村のコミュニティマップにはその歴史も記されている(Eco Museo del Casentino¹³)。

コミュニティマップは単なる地図ではなく、歴史の重なりがラッジオーロを形成していることをビジュアルで表している。歴史として、コルシカの植民地だった歴史、中世の武器の鋳造、聖人や人物、伝説が描かれた。自然要件として、河川、地域固有の動植物が描かれている。人的要件として、人々の記憶に残る 25 の場所、栗の乾燥小屋や橋や水車といった建造物、旧市街(チェントロ・ストリコ)の地図と構成、機械化される前の輸送手段(動物)、養蚕に用い

¹³ Eco Museo del Casentino. (n.a.) “Ecomuseo della Castagna e della Transuanza.” (2025 年 5 月 20 日閲覧)

<https://ecomuseodelcasentino.it/it/ecomuseo-della-castagna-e-della-transumanza>

た道具・雪駄・栗を粉砕するバスケットといった農業に関わる工芸品、林業に関わる炭焼き小屋や木材としての栗を運搬する街道がある。栗の乾燥小屋も地図上にプロットされている。

住民たちによるコミュニティマップ作成が、共創的産業の創出に与えた影響は大きい。第1に、地域のアイデンティティの断片を保存できた。住民は自分たちの文化的遺産を再認識し、地域に対して誇りを持つようになった。第2に、地図に記載された重要な場所や課題にもとづき、地域の改善プロジェクトが実施された。たとえば、地図をきっかけに、ディアヴォリーナの水源の道(Sentiero della Fonte della Diavolina)の保護プロジェクトが始まった。第3に、文化的・社会経済的な向上を目指す活動が展開された。たとえば、レストラン、B&B、アルベルゴ・ディフーズ(分散型ホテル)の開設や「イタリアの最も美しい村」への登録が行われた(Marengo, et als., 2024)。

以上の通り、住民たちの身体的な経験と共同作業を通じた地域との関わりは、地域愛着の形成にとって重要である。プロジェクトを通じて、参加者が地域の自然、文化、社会的資源を理解し、地域への愛着や帰属意識が強化されるからである(Calderone, 2023)。地図をきっかけに、毎年、ラッジョーロの対話(I Colloqui di Raggiolo)という会議が開催され、地域の物質的・非物質的遺産の保存と評価を議論している。地域の教育活動にも活用され、地図の内容を若い世代に伝え、地域の文化的遺産の価値の共有に取り組んでいる(Marengo, et als., 2024)。

3.4. 「農業がある暮らし」という価値をテコにしたネットワークの構築¹⁴

2014年に誕生したカセンティーノ有機ディストレット協会(L'Associazione Biodistretto del Casentino)は、多様なステークホルダーのネットワークである¹⁵。活動の主な目的は、農業およびその他の生産分野における有機農業の生産方法の促進、普及、保護であるが、それだけではない。1次、2次、3次産業間の相互依存と、農山村の資源を統合的に活かした新事業の複合的取り組みによって、他産業との統合的新事業を創出する。

小人数で始まったが、彼らの情熱と意欲によって、農家、繁殖農家、職人、協会、加工業者、連帯購入グループ(GAS)、宿泊施設のオーナー、および個人が参加し、結束力があり、構成メンバーが多様なグループへと成長した。

信頼と社会的ネットワークの形成、および知識の交換を基盤として、関係者の積極的な参加を促す。有機農業の文化を、品質、健康、労働倫理、生物多様性の尊重を保証する哲学や生産方法として共感する人が、協会に参加している。

他産業との統合的新事業も創出している。1)生産者の経済的尊厳の回復、2)生産者と消費者との信頼関係の強化、3)季節性とショート・フードサプライチェーンの意味と価値の再付与、4)子供たちに買い物は店頭の棚からではなく大地から行うものであることを教える教育、

¹⁴ 本節は、Il Biodistretto Casentino 会長へのインタビューに加え、協会の HP を参照した。

<https://biodistrettocasentino.blogspot.com/p/il-biodistretto.html>

¹⁵ ディストレットという言葉がついた名称だが、ディストレットの法律で認定されている組織ではない。

5)伝統的作物の維持、6)オルタナティブな経済形態の支援と実験、7)知識共有と継続的学習による地域の実践と伝統の評価、および7)訪問者へのカセンティーノの歴史、美しさ、豊かさの説明である。

3.5. 価値実現のための体制と手段

価値を生み出す手段は3つある。多様な形態の環境再生型農業の構築、農産物・食品を活用した地域循環型のショート・フードサプライチェーンと就業機会創造、および農業がある暮らしと近隣都市住民との社会距離の短縮と関係人口の増加である。具体的な活動を用いて、それぞれを説明する。

3.5.1. 手段1: 多様な形態の環境再生型農業の構築

多くの農家が、事業の拡大よりも、環境の再生と持続可能性を優先させる姿勢と信念を持ち、環境再生型農業によって、社会経済的エコシステムを実践している。

プラトヴェッキオ・スティア村にあるルカテッロ農園(Lucatello)は、上記の有機ディストレット協会のメンバーである。カセンティーノ森林国立公園の麓に位置する¹⁶。33ヘクタールの面積の23ヘクタールが耕作地(うち放牧地1.5ヘクタール)で、10ヘクタールが栗やナラの森林地帯である。1986年、マウラ・ルカテッロ氏(Maura Lucatello)が設立した。マウラ氏は未亡人だが、息子のジョルジョ氏(Giorgio Orlandi)は専業で、娘のマチルデ氏(Matilde Orlandi)は兼業で、事業を手伝っている。

農園では、古代小麦であるスペルト小麦を中心とする穀物の有機栽培に力を入れ、アルファルファ等の動物用飼料栽培、および肉用のリムジン牛5頭、乳用ヤギ15頭、自家消費用豚を飼育する。牛肉とヤギの乳からチーズを生産し、農場のゲストに提供する。肉もゲストに提供するが、直販でも販売する。

マウラ氏とジョルジョ氏は、農業は自然環境の保護を目的とした活動でなければいけないという信念を持ち、生産を追求するだけではなく、地域の自然遺産と文化遺産全体の価値向上を追求する。設立当初から自然環境の保護と生物多様性の維持のために、有機農業を実践しながら、地域社会や観光客に向けた教育活動や観光サービスを提供し、自然と人との調和を目指す¹⁷。

自然保護として、建物はバイオ建築で、エネルギー効率を高めるために太陽光発電や熱太陽パネルを導入した。バイオプールは塩素を使用せず、昆虫や鳥類の生息地を保護する。植

¹⁶ トスカーナ州とエミリア=ロマーニャ州にはさまれたアペニン山脈に沿って広がる標高550メートルのカセンティーノ森林国立公園は1993年に設立された。約360km²の広大な面積を持ち、イタリアで最初に設立された総合自然保護区で、古代ブナの林やユネスコ世界遺産に登録されたサツ・フラティーノ保護区(エミリア=ロマーニャ州側)がある。ルカテッロ農園があるプラトヴェッキオ・スティア(Pratovecchio Stia)は、この公園の麓に位置する(Rete Rurale Nazionale, n.a.)。

¹⁷ ルカテッロ農園は、循環型農業を実践するために、若手農業者の育成(PSR 2007~2013の措置112)、農業ビジネスの近代化(PSR 2007~2013の措置121)、および有機農業(PSR 2014~2020の対策11)の補助金を受けている。

物の剪定後の残留物を小動物の隠れ家として利用し、石垣や草地を維持することで生態系のバランスを保つ。

教育活動として、環境と生物多様性に関する問題や地域の歴史・文化を、若い世代に紹介する。ダイバーシティを尊重し、障害者にも対応可能な施設や自然散策路を整備したことから、教育プログラムへの参加を促している。

観光サービスとして、カセンティーノ森林国立公園の自然環境を活用した観光事業を展開する。マウラ氏とマチルデ氏は環境ハイキングガイドで、公園の専属ガイドとして、動物の足跡や植物の識別、ハイキング、乗馬、マウンテンバイクツアーなどを実施する。冬にはオオカミの調査活動を行う(Rete Rurale Nazionale, n.a.¹⁸)。

写真 6 畑で採ってきたハーブと花をゲストに説明するマウラ氏
(この後、これらを用いて作ったパスタがふるまわれた)



出所: 2025 年 5 月 2 日筆者撮影

写真 7 母のマウラ氏を手伝う畜産家の息子ジョルジョ氏



出所: 2025 年 5 月 2 日筆者撮影

¹⁸ Rete Rurale Nazionale. (n.a.) “Azienda Agricola Lucatello”. (2025 年 5 月 22 日閲覧)
<https://www.reterurale.it/flex/cm/pages/ServeBLOB.php/L/IT/IDPagina/18661>

3.5.2. 手段 2: 農産物・食品を活用した地域循環型のショート・フードサプライチェーンと就業機会創造¹⁹

農家が1次、2次、3次産業を結び付け、ショート・フードサプライチェーンを作る。ラッジオーロ村には、地域循環型のショート・フードサプライチェーンが形成されている。マリナー・カステッリ氏(Marina Castelli)を中心とするヴァルテッジーナ・キロメトロゼロ協会(Associazione Valteggina KM0)は、オルティニャーノ・ラッジオーロ市(Ortignano Raggiolo)の集落にある。

2022年6月、ヴァルテッジーナの農業と職人の生産を向上、促進するためかつての肉屋に、新しい店舗をオープンした。市から支援を受け、協会の生産者グループは、カセンテイーノのスローフード・コンドッタ団体(Condotta Slow Food del Casentino)や地元住民らと協力し、土地を取得して共有財としてのコミュニティ・ラボラトリーと販売拠点にした²⁰(Fondazione Slowfood; Profilio, 2020²¹)。全ての組合員は農家で、畑の仕事があるため、営業は週2日である。「私たちが作るものの最初の顧客は、私たち自身である」と言い、農薬や化学薬品を使用しない(Arezzo Notizie, 2023)。

取り扱う産品は、古代穀物のスペルト小麦、カスタンネ(栗)、マッローネ(栗)など、地域を特徴づける産品を中心に、野菜、豆類、牛乳等の農産物、およびチーズ、蜂蜜、ジャム、ビール、蒸留酒、煎じ薬、ハーブティー等の加工品である(Arezzo Notizie, 2023)。

営業時間外は、農家の人たちが、パン、ジャム、トマトソース、保存食などを実験的に生産できるインキュベータ機能を持つ。果物や野菜を保存食品に加工したり、焼き菓子を調理したりするための多機能で展示型のラボラトリーである(Profilio, 2020²²; Fondazione Slowfood)。

¹⁹ 本項は現地での会長への取材に加え、Fondazione Slowfood HP を参照した。

<https://www.fondazioneSlowfood.com/it/mercati-della-terra-slow-food/mercato-della-terra-della-valteggina/>

²⁰ スローフード・コンドッタは、イベントを通じて、食べ物がどこから来るのか、およびその栄養の情報を伝え、地元の生産者との関係作りと健康的な食べ物の消費を促進するグループである。

²¹ Profilio, Alessandra. (2020) “Sette produttori locali si uniscono e danno vita a un negozio-laboratorio a Km0,” Italia che Cambia. (2025年6月14日閲覧)

<https://www.italiachecambia.org/2020/07/sette-produttori-locali-si-uniscono-danno-vita-negozio-laboratorio-km0/>

²² Profilio, Alessandra. (2020) “Sette produttori locali si uniscono e danno vita a un negozio-laboratorio a Km0,” Italia che Cambia. (2025年6月14日閲覧)

<https://www.italiachecambia.org/2020/07/sette-produttori-locali-si-uniscono-danno-vita-negozio-laboratorio-km0/>

写真 8 店舗は加工品開発のインキュベータ機能を持つ
(左からブドウビール、栗ビール、スペルト小麦ビール)



出所: 2025 年 5 月 3 日筆者撮影

2025 年現在、商業活動が大幅に減少した集落で、唯一残っている食品販売店であることから、住民にとってなくてはならない存在である。厳しい現実ではあるものの、同時に、ショート・フードサプライチェーンによって、農家や中小企業の所得を向上させることが期待される(Fondazione Slowfood)。

店舗での販売に加え、農家たちは、消費者に直接コミュニケーション活動を行ったり、移動型マーケットとして祭りや祝賀行事に参加して販売する(Fondazione Slowfood)。2023 年現在、11 軒の農家が、スローフードのヴァルテッジーナ・アース・マーケットのネットワークに参加し、販売活動を行っている(Arezzo Notizie, 2023)。

3.5.3. 手段 3: 「農業がある暮らし」と近隣都市住民との社会距離の短縮と関係人口の増加

ラッジオーロ村のエコミュージアムとコミュニティマップ作成のプロジェクトを通じて、住民が「農業がある暮らし」を自分ごと化したことで、レストラン、B&B、アルベルゴ・デ・イフーズが開設され、関係人口が増加した。

2011 年時点の公式な人口は 98 人であるが、ブリガータのフランチェスキーニ氏の推計によると、人口は 60 人である。ここでいう人口は、村を公式な居住地として登録した人の数を指す。その他の住民は、オルティニャーノ・ラッジオーロ域内のバディア・ア・テガ、サン・ピエロ・イン・フラッシーノ、ラ・ヴィラなどに居住している。また、集落に公式住所を置いているものの、実際にはビッビエーナやポッピといった近郊の町、あるいはフィレンツェやアレッツォなどの都市に居住している住民もいる。

常住者はごくわずかだが、夏には都市部から休暇で訪れる人が急増する。夏期居住者は、家族の家を保持し、良い季節に帰省する元住民とその家族である。あるいは、カセンティーノの自然や静けさに惹きつけられて家を購入したフィレンツェやアレッツォの都市住民や、1～2週間の休暇のために家を借りる夏期居住者もいる。

農業の生産物をテーマにした祭りは、関係人口増加に欠かせない。夏に開催されるラッジョーロ村のピッツァイベントでは、かつて栗のパンを焼いていた共同窯を使ってピッツァを焼く。モッジョーナ村のポルチーニ茸祭りは、人々が楽しみに待つイベントである。住民がボランティアとして積極的に参加し盛り上げる。

写真9 モッジョーナ村の特産品ポルチーニ茸の料理
（[手前]ひよこ豆のスープのポルチーニ茸乗せ、[奥]ポルチーニ茸のフリット）



2025年5月4日筆者撮影

3.6. 豊かさや愛着と誇り

人々は地域への誇り、仕事への誇りを持ち、持続可能な地域社会を実現している。農村景観は、住民の地域への愛着を象徴する。ブドウ畑、オリーブ畑、古い農村建築は、地域の歴史や文化をものがたり、住民にとって誇りの源となる。これらの景観は、住民が先人から引き継いだ地域の価値を守り、次世代に伝えるために費やした努力の結果である(Ferreri, 2023)。

カセンティーノのコムーネの合併話が持ち上がったが、地域住民投票(referendum consultivo)を実施し、住民は合併に断固反対して立ち消えになった。解決すべき問題を抱える小さな農村が、大きな自治体と合併することで、自分たちの問題に十分な注目が払われなくなり、農業や零細の産業にではなく、大きな自治体の商工業に焦点が当たること、結果として農村の衰退や消滅を招いたり、地域のアイデンティティを失うことを恐れたためである。

農業がある暮らしが生む特産品は地元住民の誇りのシンボルである。1961年、映画「テ

「イファニーで朝食を」で、オードリー・ヘップバーンが、ラッジオーロ特産の生地を起毛させ加工したナッピングウールのコートを着用した。そのポスターは、筆者らが訪ねた村の羊毛アパレル店に飾られ、店主が自慢げに紹介していた。

農家の人たちは、カセンティーノの農民であることに誇りを持っている。キロメトロゼロ協会では、メンバーが「私たちはカセンティーノの農民」というメッセージが書かれた T シャツを着用していた。

写真 10 私たちはカセンティーノの農民(T シャツのメッセージ)



出所 2025 年 5 月 3 日筆者撮影

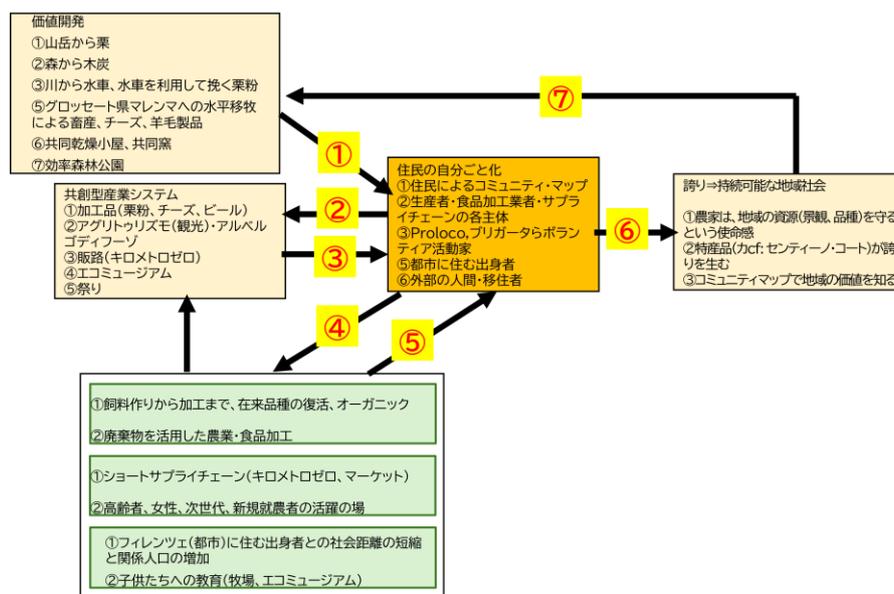
4. おわりに

カセンティーノの事例は、持続可能な地域社会の形成プロセスを教えてくれる。都市を優遇し、農村および農業全般をむげに扱っているように見える現代の状況に対する抵抗(レジスタンス)のかたちでもある。居住者が減り、産業自体が衰退したことで、経済価値を生むことは難しくなったが、日本のように限界集落のレッテルを貼り、消滅を待つだけではなく、住民や近隣都市住民は農業の多面的機能の恩恵を受けている。具体的には、ラッジオーロ村では、ボトムアップ型の住民参加によるコミュニティマップの作成過程で、栗産業と羊畜産業と地域の結び付きが描かれることになり、住民の地域への理解と愛着と誇りが深まった。モッジョーナ村では、エコミュージアムで、プロローコに教わりながら、観光客が木製品作りを体験することもでき観光資源になっているだけではなく、住民も地域のアイデンティティを再確認することができる。

カセンティーノの事例は、農村の内発的発展であるといえる。なぜならば、第 1 に、規模は小さいながらも、地域に根ざした特定の産業があるディストリクトが、1 次、2 次、3 次産業間の相互依存関係と地域資源の活用で新事業を創出しているからである。第 2 に、住民にコミュニティマップ・プロジェクトに参加してもらったり、エコミュージアムの管理の権

限を委譲し、ボトムアップ型にしたことで、住民が自分ごと化できているからである。山岳内陸部ではあるものの、フィレンツェに近く、多くのフィレンツェ市民がセカンドハウスを所有していることから、魅力がある地域といえる。

図 5 カセンティーノのテリトリー・プロセス・モデル



出所：調査をもとに筆者作成

日本では、大学生の子供が、自分は企業に就職せずに農業をする、農村に移住すると言ひ出したら、ほとんどの親は反対するのではないだろうか。イタリアと比べて、地域に対する誇りや愛着が希薄で、給与の高い大企業に就職し、東京に住むことが豊かな社会であると考えているようである。

日々の暮らしが可能な経済的基盤があり、地域固有の自然や文化から得られる精神的・物質的恩恵、地域コミュニティの構成員・準構成員としての生きがい、および地域への信頼・誇りによって、豊かさや愛着や誇りを実感できる。テリトリーは、そのような豊かさや愛着や誇りを実感できる機能が埋め込まれた社会システム、およびその地理的範囲である。

単なる農村振興ではなく、社会の価値観やパラダイムをシフトさせるための第一歩は、地域の地形、共有財、それらを活かした産業、歴史景観や伝統的な産業による産業観と遺構、それらと結びついて形成された伝統文化、人々の共助意識、行動様式、食生活の発掘・再発見である。

地域住民が活動に参加するというプロセス自体で、地域の価値を再発掘できる。たとえば、ボランティアな集まりが、地域の価値を再発見している。2015年、ミルク好きが集まったミルク1万年の会(代表世話人: 前田浩史)が創立された。ユニークな活動の1つにブラミルクがある。酪農乳業の歴史景観、遺構、および伝統文化を、まち歩きをしながらたどってい

く。意外にも、東京は、乳の産業の歴史が長い(前田他, 2022)。たとえば、筆者が所属する法政大学は、江戸時代は旗本屋敷であったが、1873年(明治6年)、猪股要助が牧場兼搾乳所を開いたという歴史がある(金谷, 2021)。ブラミルク体験で、まちの魅力は現代に歴史を重ねた時に立ち表われることを実感できる。歴史を再発掘して、現代の都心に酪農乳業を取り戻そうと言っているのではない。都心のいたるところで行われている再開発という名の自然破壊や蓄積された歴史の破壊を反省し、見直すことをきっかけにして、持続可能な地域社会を意識したまちづくりがなされるはずである。都心の人たちは、高層ビルやタワーマンションではなく、歴史と繋がったまち、そこで育まれた人と人との結び付きやコミュニティに愛着と誇りを感じるはずである。

【参考文献】

Arezzo Notizie (2023) “Ecco il Mercato della Terra della Valteggina: l'inaugurazione,” 2023年4月26日付

<https://www.arezzonotizie.it/eventi/mercato-terra-valteggina-inaugurazione.html>

Bini, Chiara. (2023) “Vitellone Bianco Appennino Centrale IGP: Festeggiati 25 Anni di Storia, Gusto e Qualità,” Toscana Notizie, 2023年6月25日付(2025年6月6日閲覧)

<https://www.toscana-notizie.it/-/vitellone-bianco-dell-appennino-centrale-igp-festeggiati-i-25-anni-di-storia-gusto-e-qualit%C3%A0>

Bocchi, Stefano. (2018) “Agroecologia per Nuovi Paradigmi Distrettuali Integrati,” Scienze del Territorio: Le Economie del Territorio Bene Comune, 6, 77-84.

Calderone, Gloria. (2023) “Corpi che Progettano. Pratiche Artistiche Body-based come Sfida Metodologica per un'Urbanistica Performativa,” Scienze del Territorio, 11(1), 63-75.

<https://doi.org/10.36253/sdt-14447>

Eco Museo del Casentino HP (n.a.)

<https://ecomuseodelcasentino.it/it/i-musei>

Eco Museo del Casentino (n.a.) Rete Ecomuseale, Mostra Permanente sulla Guerra e la Resistenza in Casentino: Bottega del Boigonaio, Percorso del Lupo

<https://ecomuseodelcasentino.it/it/bottega-del-bigonaio-e-mostra-permanente-sulla-guerra-e-la-resistenza-casentnoi>

European Union. (2020) “Territorial Agenda 2030: A Future for All Places,” Informal meeting of Ministers responsible for spatial planning, territorial development and/or territorial cohesion, Dec 1, 2020, Germany.

https://ec.europa.eu/regional_policy/sources/brochure/territorial_agenda_2030_en.pdf

Ferreri, Fabrizio. (2023) “Agricoltura e Autosostenibilità nel Quadro dell'Eco-Territorialismo: Resistenze e Prospettive a Partire dal Caso di Studio Sambuca di Sicilia,” Scienze del Territorio, 11(1), 102-111.

<https://doi.org/10.36253/sdt-14170>

林良博・高橋弘・生源寺眞一(2005)『ふるさと資源の再発見:農村の新しい地域づくりをめざして』家の光協会。

金谷匡高(2021)「明治初期に始まる東京旧武家屋敷の牧場転用による都市空間の変容について」『日本建築学会計画系論文集』86(781), 1189-1196.

木村純子(2022)「テリトリーの内発的発展」木村純子・陣内秀信編著『イタリアのテリトリー戦略: 甦る都市と農村の交流』白桃書房.

木村純子(2024)「日本版テリトリー・モデルへの試論: 中小乳業メーカーの事例を手がかりに」『法政大学イノベーション・マネジメント研究センター・ワーキングペーパー』261.

木村純子(2025)「日本版テリトリーの創出: 都市農業の多面的機能と地域コミュニティ形成」『法政大学イノベーション・マネジメント研究センター・ワーキングペーパー』269.

La Sala, Piermichele., Tarangioli, Serena., Lucia, Briamonte. & Tomassini, Stefano. (2023) "La Rete Rurale per il cibo italiano: i Distretti," 2023年9月28日付
<https://creafuturo.crea.gov.it/10664/>

前田浩史・矢澤好幸編著(2022)『東京ミルクものがたり: 東京酪農乳業 史跡を巡るガイドブック』農山漁村文化協会.

Marengo, Marina., Lopez, Lucrezia. & Rossi, Andrea. (2024) "Community Maps: A Participative Tool for Land Use Enhancement: The Case of Casentino," *Geography Notebooks*, 7(2), 65-80.

Marshall, Alfred. (1920) *Principles of Economics* (8th ed.), London: Macmillan. (西沢保・藤井賢治(2024)『経済学原理第2巻』岩波書店.)

Mascarenhas, Gilberto. & Touzard, Jean-Marc. (2018) "The Social Construction of Quality in Agri-food Localized Systems (SYAL): The Case of the Montpeyroux Wine Arrangement, France," *International Journal of Sociology of Agriculture and Food*, 24(2), 275-302.
https://hal.inrae.fr/hal-02622646/file/2018_Mascarenhas%20Touzard_1.pdf

Molducci, Chiara. & Rossi, Andrea. (2015) *Il Ponte del Tempo: Paesaggi Culturali Medievali*, Arti Grafiche Cianferoni.
ISBN 9788890732638
<https://ecomuseodelcasentino.s3.eu-central-1.amazonaws.com/s3fs-public/2022-08/IL+PONTE+DEL+TEMPO.+PAESAGGI+CULTURALI+MEDIEVALI.pdf>

日本農業新聞(2024)「基本法改正 食と農はどこへ(5)農村政策 人口減少 描く未来は」2024年6月7日付.

農林水産省(2019)「第3章地域資源を活かした農村の振興・活性化」『令和元年度 食料・農業・農村白書』
https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/r1/r1_h/trend/part1/pdf/c3_1_00.pdf

Perkins, Chris. (2007) "Community Mapping," *The Cartographic Journal*, 44(2), 127-137.

Rete Ecomuseale. (n.a.) "Mostra Permanente sulla Guerra e la Resistenza in Casentino: Bottega del Boigonaio, Percorso del Lupo".
<https://ecomuseodelcasentino.it/it/bottega-del-bigonaio-e-mostra-permanente-sulla-guerra-e-la-resistenza-casentnoi>

Rete Rurale Nazionale. (n.a.) Azienda Agricola Lucatello.
<https://www.reterurale.it/flex/cm/pages/ServeBLOB.php/L/IT/IDPagina/18661>

Rete Rurale Nazionale. (n.a.) "Azienda Bio-Agrituristica Lucatello: Dove Rispetto per la Natura e Cura

dell'Ambiente Sono Elementi da Difendere e Diffondere”. (Rete Rurale. (n.a.) Azienda Agricola Lucatello 内のインタビュー記事)

Rossi, Andrea. (2011) “La Pratica Partecipativa negli Ecomusei Italiani Aspetti, Strumenti e Potenzialità,” in Vesco, S. (ed.), Gli Ecomusei. La Cultura Locale Come Strumento di Sviluppo, Felici Editore, Ghezzano, 105-123.

Rossi, Andrea. (2016) “L'Ecomuseo del Casentino; Progetti e Pratiche Partecipative per la Tutela del Paesaggio, il Riconoscimento e la Valorizzazione del Patrimonio Locale,” Scienze del Territorio, 4, 129-134.

Rossi, Andrea. (2022) Ecomuseo del Casentino, Fondazione CR Firenze. (パンフレット)

Rossi, Andrea. (2023) “Eco Museo del Casentino; Progetti e Pratiche Partecipative,” in 3° Sessione: Gli Ecosistemi d'Identità Culturale Locale, Youtube of ANCI Toscana Progetto RACINE, [28:19~58:30].
<https://www.youtube.com/watch?v=fCWBZwgZZQw>

Sarno, Emilia. (2017) “La Cooperazione Transfrontaliera come Esperienza Bottom Up. Prove Tecniche tra Molise e Montenegro,” Bollettino della Società Geografica Italiana, Roma, Serie XIII, X, 247-256.

Toccaceli, Daniela. (2015) “Agricultural District in the Italian Regions: Looking Toward 2020,” Agricultural and Food Economics, 3, Article number 1.

本研究は、2024年度～2025年度国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)令和6年度共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)地域共創分野・育成型「農村と都市との豊かな結びつきを育む「いわて畜産テリトリー」創造拠点」、および2025年度～2027年度科学研究費補助金基盤研究C「商工業と農業の理論的・歴史的接合：イタリアのテリトリー概念を手がかりに」の支援を受けた。



本ワーキングペーパーの掲載内容については、著編者が責任を負うものとします。

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター
The Research Institute for Innovation Management, HOSEI UNIVERSITY

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

TEL: 03(3264)9420 FAX: 03(3264)4690

URL: <https://riim.ws.hosei.ac.jp>

E-mail: cbir@adm.hosei.ac.jp

(非売品)

禁無断転載